



唐詩評

貞永十年吉野本
所及徒不用筆

特別
~ 5
6068
1



保永
藏
家記
共
二
卷

丁少牛

橫山重



おもしろくしつと年の一と書
りし時ふくこめしあはれふゆ
ましねると心乃とあそびりよさ
あつめしつとあそびとあそび
るん

吾我園子年入て住らるる同詔諧教
句并ね奇

菱長十の五年

元日

徳元

雪也先と雪千ら乃元祿九年

同書年

日御さへ移りてやとをきくし
元日そりありはれハ

あひよあひあひさうの日はあひ

月

若くやまらあよむよふふの春
たうと云あういんて

さよ年とあええい集のたう

己の年元日

これと秋うまのういんて

大海日貴少の翌年子

らうしん皇やうううう春年

若別の城小松象と云あういんて

正月や門と若よあふこまう

はくう根の年とにんてり柳

白のういんて

まやたうううあふとあういんて

雪あるよのらあやにあういんて

花梅のたうういんて

天神へ海へ

梅の木ののかさともや 白中在在天
崇や 勅書とさるゆり所の串
甲子の冬越る國のさる所のかと子
西と若狭國のつと忠高公御加増と
しへ 拜儀所り考る次のま
ゆとわしへ 春もはつたかのちり物
正月の下の宮日は 稀人のねりへ

さうゆりけすんとかつさゆきとほつさ
とさへも若狭精をさへさうゆり子
も若狭まじしなうさへつるも天物上
鹿踏者と云ふの寺さへ
まふ雨よはとさへさるやうらる者
伊谷と云ふはゆらへ
二月のつらねや折しをたけ者
越る所と云ふは若狭三方郡

佐禰と云ふの城あり

歌の行と云ふやりの幕の紋
ひかるとや佐禰娘と云ふの花衣
と云ふと花衣と云ふと名残や青い山
と云ふと何れに桂と云ふと坂
と云ふと藤と云ふと藤葉のいろ
と云ふと藤葉の色の幕の色
又八の竹と云ふと一夜草

うはしりの所と云ふとあめりか
いと若と云ふと鳥のよと云ふといふか
まの野と云ふと心あると云ふとや物つな
角と云ふとは道の半のひらと云ふ草
うと云ふと本よのちと云ふ楮のうと云ふ
つと云ふと天福の本と云ふ佐禰物語と
りてと云ふとひらと云ふと結と云ふと時よ

てんくのまやびらの物さり
あつん平つゝまゝに料理と
よめりいささ入て出されぬ

風を引て倒あすつら
ふのりゝなれまゝまきのためと
あつん平つゝまゝに料理と
よめりいささ入て出されぬ

は茶のうらやう茶のまゝ
世よあつん平つゝまゝに料理と
あつん平つゝまゝに料理と
よめりいささ入て出されぬ

まきの川やうらやう茶のまゝ
あつん平つゝまゝに料理と
よめりいささ入て出されぬ

のつこころりてとよめい

あつ坂やこのう宿のふいめけい

とひをかくあを移る道はうなり

と心ううら守して明ぬまま日

の由社う西うそんと所とに起す

出ぬ猪込の地あり

猪澤のうととととらう花三目

それよりをひきりくう一拜まかると

西うすもあつむあうて三三山

由社うて

めうりあひぬら白よま日大明神

あつてのたきとすこのうすう家

東大寺うて

まの夜や大佛判のう祿のうま

杵名別よるう物道八生生のはに三三

斗よとあうきなうら世とあう

可とさうてんの歌うし神とらあすは
今日の我も我も持まうらんよあーん
まんとあの人と又人よああ行くわと
あんとあがりあうあ世の園よあ
ゆりゆりあああれせんさいよあ
の花のそのまをとりあをあげよあ
とゆきあ
ちりこもやああんのこりの花は露

明道、卯月朔日

魚鳥のまもゆてあやこあ久
小海より杜鰲のうのやあると啼
ゆりゆれあ
ゆりにあけあとりあせに邦も
ああ

ああ人の水のたきあれのあまた
まうてあああ山あああ

今ありて心匠の後遊え時を
去るるや夏をきいけの松が
何本とをいけよと音葉や去る山
弁花よりかの西うや去る山
少原と云里より

少原の里より一立早苗うれ
雲の上の夜ひかりやうも雲
日は露のころとこわと露の
日

春虫のそんや火よ入りうれ
風うらや火のこわあや斬る
はつと在るはるはる知るの里
さうなれ

八月雨よさるぬ境の雨戸を
はるけよりよあつ八月雨や天下
松ありてはがよ入りよ酒家
うけりてはせよとやさいよはる

茄子もやほほしく乗くははり
相舞の二人志のうのさび菓鷹の
汁さいはくおかよたさこころか
羽あけ鳥のむくおとまやうの
豆町あやうそてほひうの花島
屋に花よまといところ梅の西
梅の西ゆきれてうるやとそい
いふ瓜やあといけいせうの棚のえ

合せ子と花火とちりす斬れ
秋やとの花や何ととゆんちるを
蓮の花はさあうにりい袋か
夕立のさえりや雲の波のひ
何奇も扇うり軒の折るれ
扇うらりさうさむりや凡の
旅人や少ううな醒の蚊帳草
耳よるも啼やうはさこの山を

三つくの夜よいのじや香葉散

秋

あつひよめなふ又月の文見草
くもらと云雲きく都下てうら
け秋おらうもらしてはむ草て川
か子行よねへておれや木と二草
戸とくく風のらうや男草

下木ゆて少の草やうらら乃是
学又や何と云とれ草あの中草
まぬさうてうらやかぬむらう
一葉よの風う波ううかそそ具
七つうかどハたの夜のあらやか
秋の野を種てうらや木と二草
津川と云云何の時まらり物道何
りそや一葉さうらうらあとかい

出づる時節はいとお

鳥らもけり居て居て是れは

阿方りいおけりてありと

色々の物の中より其の右

えさくよりいとおれ小

例のろろ岩の寺へ

けえまて月はおろろ

月をけりのおろろや甲

かろろや月よりけり

八月十五夜

若月いづをけりいづ

さぬろろいづ若月と

若月とけりいづあ

虫とけり月の若よ

本丸の園やこ

年中の月とら

月とくらへてうむむはんこの天のう
つらのうやうやぬるぬるの月
かこられよめううついでや九日夜
はとほをわかりくうつとささるこ
と井の葉やちりくうつと風車
月ありてさかたつたのこをゆふ
九月九日
一にきやをへてううう葡萄うまの

咲ぬるの葡萄やいほさとしいぢふ
厚帯て葡萄やぬき踏花の露
葡萄はまたおのひめぬさの石刀とが
まくしゆも道おされや男やをめま
得この葡萄の酒うやうこれ草
得このかやううこ葡萄の酒け
初の名日名物のことくあうひひ
まへは雲うらり九月十二夜ハム

かゝる由らう作りなれハ

山城より日と若くうう後継るハ

先くしゆきまひ日の公うり系

じまゆりや栗のこの石をら目

りらりーて青葉の山のせんてか

所りの方いさ下りの角のめぬさぶ

何人使といと作りらう作りてこよ

りと西祿を造られいゆらうて

小別のでんさいの書や千世の秋

若多の庄と云右の川へ國のこまうえ

又と千出られ作り時老てハにけりさ

まといけりいあうう人かまにゆらうてねう

さぬさハ多ふらうりともや川うりよ

人ぬとらりやをばさぬぬぬ

い河らり國中へ新とありてあゆむハ

いれさうく柳たよらえぬまのさ

冬考堂けりよこの寺や神を日
度りし為業り人の所あるや文殊堂
晴西ありととらむや神ありあり
昔若狭園よ八百歳子ありうらさる
有らるとありしその名を白くにとりぬ
二元
綿やしかぬるう雲の白は在る
高深と云ふらんゆらうやねり

平らぬらうたふらぬとそや浦は
しととありうらぬのひらり
水なるや波うらうらぬのひらり
冬晴し梅よ水仙花と入今や春よとれ
うらあま
年のうらやふらぬら花の先

寛永三曆のころ都より三回年
在京よりしるる

苑ひろの餅や九重より去
りしよの筆にえりまのゆり
雲名しのくれをたの山路
あそむるやらんくわがう
西陣より立春やとうら
この中の柳の水やあひ計

奎の座お柳の多と茶湯
三きゆを柳の心とやむ
花よめや柳のむぎの
桜のりハ桜の鳥場の平
清水寺へゆ

とくらのうらやゆりの田村
小聖のうらまはうら
とよかきり

二う約の花や何もなすへ八重桜
あや電の櫓やのあうゆ系院
法草のやととゆうととと
筆よここれすこその櫓うととと
何人具はくくのりくかととと
そりあつあつ出されーかハ
耳ーあようかや何ういはつと貝
室所ハうららの花の都子

勢山うら

舌うらゆ花やうへとぬら此琴
大酒か大つうよのせ花三つハ
法の花見よ行葉もやゆんじ
まぬとらん九重のうらと花の本
うんかや狸とむむ野のほと草
建仁寺へ藤咲とるゆうら
藤ととととえんう何ゆやのら堂

あとも一冊中申さうくあつたなれ
うりさつひらと拜まなうて

白のりとのつらやあつた京より
梅の西の若女や夫よりあつた
むせふかともんあつた下子あつた
瓜あつた東寺さやううの計

秋

だうともうふも目のこのあつた

七織姫や

月弓の川あつたうさの場か
きたうにはりあつたうさの目か
長崎の屋もあつたあつた
比良山もあつたあつたの川

七月十日の夜八千日あつた上下
京の貴族男女僧侶群集清水

へ海うけて物道ハ

秋の夜の千夜と一夜はあきく

やらもあきくまのう報音

やういよゆき

はえはきくそく 旭のうのあせとの秋

月をりう社をういふにたごこ山

平ゆりうよとらんかんむりけりい

八月十日小舟入道言よ海うけて夜は入約道ハ

軍家のうらよ今夜の月や一夜雲

老書や右進のうとあのか草

雲霞の宮ういふ話う

大西田や刈うりうすう筒男秘さ

つらうらよあきやうゆの雲ひ

西山のうゆやいうえ十二りく

角うえんのうて秋うう山標ふ

閑入やうれの中うりきこあう笠

長月十日のころ二條堀川のころらへ紅葉
ありけれ

堀川の赤葉や月よきとり橋
やりのえや長月ころらへ過ぎぬ
大位六位左衛門守久と紅葉の家
遷幸の又の日は幕下御氣田あり自出な
治守ころらへ天下也相國家家康卿ころらへ三
代ありけれ

いづれを存ん今を名や西所んたい
葉中紅葉へ物とにゆり

冷虫やあつところのワタ
南菊のけけは菰や福荷山
まけけや千この秋とふ仙草
うえゆりけれ

鳥羽ありやえれをよみは秋の山
大徳寺一休和尚菴家実ころらへ

始に名やうむむのすり小神

末はむ花

より出やううま酒は花のえん

紅葉

赤荏院やあうさうさう紅葉

花のえん

うう咲けの茶のまや花のえん

茶

笑長の宮よあめのかきり刀から

柳

ううま葉とさうくのめや三つ

花らう里

うう新道は花らう里がふい

治平

日の若をいほくそあまや治平

明石

こころめれ膝をうへて目もろくか

玉ろく

露やあけ柳のうしろのむろく

ころ

こころにあく雲の初音ろく

こころ

ちろ花よりいころくすろ小蝶か

螢

雲の上より初やけの共部柳

床反

朝起の床反すくく花の露

篝火

くろ火より焼阿ゆきろ鶴か

聖分

あちろろ花聖は行ろ野分か

伊茶

雪餅とくふたりの西葉の

藤えり

むしやうやうえりこいさぬみそ袴

高木相

埋火のまらやうさうへゆさりら

梅りえ

梅りえいすせとさう長えりか

藤のうらこ

さき長うゆうなうらこ

さうら

ほじとほさあやらこさうさ

うらま

ちうくまかまらるる物の度

横巻

よこさくおまの夏の初とら

珍虫

今治十帖

栲娘

川のあや水くもるる朝こけり

志井うりも

ほろろひて平毎よひるゝ推る奉

聖徳

あけまさるや糸も毛後う西祿る

さうらひ

ほろろひのちえろくやふらの焼島
をとりま

口のえいやはつひやとりまは只ひ移

あつや

あつもなよ有独人や閑果気

うさみ

風さえろくや浮舟よ酔心

けろふ

月花よりきりふりうねとこふ

平習

平あふいのいろはやまのふぢあ

夢 浮橋

露の世や 夢の浮橋名跡行

秋の六儀の詞えうりといゆり教のよ
詠 久多

鶯のうりーいあふののいれが

賦 久多

短冊や 去いん所とりあふ奇

比 あふのう

さなとめや 千世とあふのうぢ

貞たふのう

こさこころのうたに日やたとあふ奇

雅 うることあ

桐の舟よたるときののりゆま
頌いよのりま

豊年といひひるまの三書ハ

寛永五年林檎のまつるは栲呂珠
公よよまふらわく津國有馬へゆり在
湯津のはましくその年の日あるま書
託しけりまると為氣一深ありや
自筆よとみ果ま書と加へ候うぬ筆の
次へま書よこれとま書おあり

正月大

百若ろよ平のまこののりま朝か

二 子白よやゆらこやり二白麟
三 若うしはたか金さる貝や地神
四 正月の礼やすうらうのま
五 星雲の世まかりらのりこれ
六 あつさまりたるうらまうらういさか
七 つらうれをうはたかやひめをか
八 長草やるすの苑めく佛の座
九 けうつさるとこ板うらまうら

十 いとあそふらまの門のまこれ
十一 やすうやや病うめに西と松の花
十二 け不糖の鷹やけあじこ子有羽
十三 鷹をよゆうらやまかひれねひま
十四 うえ竹のけえう年こそこの坂
十五 けさちるややえんとくまふま物
十六 けけううらんとあらやまうら
十七 うえ竹のまこのまの福うら

六 うえ竹はあひまの書や千世の志
七 かり梅や先づすらん花づくさ
八 珍梅の長えまゝとくよまゝえり家
九 物あれはさうしうあらんし梅
十 梅所かははけけやまら花の宿
十一 去ぬり先勝やすうひかこ書
十二 是りののりまやむじうんよあつん
十三 うららよのあやまらう程美か

其 うららハ程の口さうらゆらんか
其 うららハま白よあれおさ大か
其 ちり芥の習さうけのまらんか
其 えらりまやうらけけさうはし
其 目ゆりよまささうらぬらん書

二月大

何う版うまやあゆまらん
たむ危う系らうけけし柳

三 釣針の糸もやのれ柳え
四 露じもふもるやあけ糸柳
五 りも出てもあるやゆもえん柳
六 浦碇のあけてなむやえこ柳
七 酔れよるもやえり柳
八 今もいもやゆもえん柳
九 のへてえ柳り物汁のえ
十 楊いよのゆも板もす柳りか

一 柳楊えんやけりえのゆゆか
二 川せえのりくにえり糸柳
三 のらるるも物あけよこゆもえ
四 堂りもあけけりもえり
五 山佛よ平向えんゆり
六 山崖の平とえり柳り
七 かりもや部えんも井の茶の糸
八 三三しくあつたあらのいもやり

十九 江戸のひらきこゝろをよす寸ゆの草
十八 牛の子よあつて角くらじゆらか
十七 目とほくまひの牛の乳この鬼物ゆ
十六 築山うととくくとをさうた丸か
十五 小たうまのうりまらあつひんりか
十四 死あうう鳥やひらり毛春のる場
十三 日の幸てしりわてあやーりを雀
十二 羽よふ居るひらにまらひの場か

十一 花多のうとらんをせたりか
十 雀雀うらまをよまの天の物こ
九 丸こけよまるや焼節のまこれ
八 二のけもて舞やあけおの蝶ゆ

三月小

七 春をとり末よ翔るまうーか
六 大豆の粉とけりやまーい餅
五 三のけや鬼一口のよりさまら

一
四 茶葉入て種やいほれとすいかに
五 だるま天よ咲りえんほりりまんけ
六 色々香とあうらんやあう古茶煎茶
七 多あうり葉やし茶よほむ鷹丸
八 少たるやういふ茶こりのほしおぬ
九 多れ物の籠よほりていほかすこま
十 葉のこまはらるさよすこれの那
十一 折よあう門いといらちよりいこ

一
十二 昔時考やこほりたうー花うつ不
十三 せんくうきうやきぬのうん梅
十四 寺よほりひくくはうもひうん梅
十五 子じよえおね建長やうん梅
十六 白妙の指やあううん梅
十七 風うううう梅やあううん梅
十八 尺よゆい河内山の大さう
十九 形考うー花や信尾の家はう

六 さげとあうすあゝ弁苑や町
七 忍やうふはかのの本よわとら守
八 奇よまの宿とせたとせよ都么
九 丁うくとらゆせ園路の都么
十 かりのふれ若えふふたうとら
十一 本刀よせようの木のなこら
十二 村西とゆやようらうなまら
十三 づらとゆとらやれらうのまら

十四 うぬとら一鷹やこら一の苑の板
十五 さうひやにきうこら一のなまら
十六 なうけう嘆らうらう手ゆら
十七 毛とら一居住井らやうひた
十八 狐火とらあり糸のかりり
十九 うらわや日吉糸の神ま
二十 若のれらさげ月くのま
二十一 ち屋くやこの酒とらりある苑

一
七
六
五
四
三
二
一
を
新
く
い
ら
り
將
人
や
竹
ら
ら
ら
を
草
を
あ
り
取
い
ぬ
由
伊
の
女
の
ら
ら
を
草
共
な
の
夜
の
や
は
ら
ら
を
あ
ら
う
か
ま
ら
す
寸
火
く
く
く
く
く
酒
の
量
が
共
軒
と
ふ
ら
ら
を
ら
ら
海
の
火
打
石
共
ま
白
壁
よ
こ
ら
け
て
と
ふ
あ
の
量
が
六
海
伏
を
や
い
ら
ら
わ
ら
ら
の
昔
部
に
七
山
り
い
ら
ら
に
ゆ
ん
一
つ
つ
花
と
か

五月大

一
七
六
五
四
三
二
一
百
さ
と
と
や
ら
う
く
ま
の
ほ
く
六
回
の
う
二
竹
の
子
の
あ
ら
り
や
ら
ら
さ
あ
か
三
あ
と
く
く
く
又
竹
の
あ
や
む
じ
め
の
酒
四
き
ら
い
ら
ら
よ
こ
ら
け
て
と
ふ
あ
の
量
が
五
あ
ら
う
か
ま
ら
す
寸
火
く
く
く
く
く
酒
の
量
が
六
海
伏
を
や
い
ら
ら
わ
ら
ら
の
昔
部
に
七
山
り
い
ら
ら
に
ゆ
ん
一
つ
つ
花
と
か

ハ 尊すられたるうらむひらきかしのこ
九 のうらむやうらむひらきかしのこ
十 布引の境やゆきゆきゆき
十一 夕暮と夕暮の夕暮
十二 うらむのうらむやうらむ
十三 軒入りうらむのうらむ
十四 可子の子のうらむ
十五 吹風やゆきゆきゆきと花の露

十六 花よあけひめゆきゆきゆき
十七 春秋うらむゆきゆきゆき
十八 春のうらむゆきゆきゆき
十九 うらむのうらむゆきゆきゆき
二十 友切よ茶入やゆきゆきゆき
二十一 ひらきかしの衣の玉ゆきゆきゆき
二十二 ちりやゆきゆきゆきゆき
二十三 船あきゆきゆきゆきゆき

一
花鮎のくへ平なうへりほふうのひか
まゆささけやあひまをあらぬ花衣
まひけけんゆひてまほむ花の先
花とらんのを祓よゆさけけぬひら
六 鷹の尾のたこ木てなよとちか
九 神の木の花を祓言うらうれ
十 せ戸まきと水鶏のうへく門白か

六月小

一 園くののこかりま住や氷雪守
二 ぶらうてひうまうじん一夜さけ
三 夜念佛やらうさ林の境のしん
四 ち雲とらうさてやひつ祓りそ羅
五 さぬまの山へやあう祓りひんり
六 ちしこのうまひるさ石の所
七 床のみの花まや祓あうまやのま
八 夕ふのの家はなれうらたさ

九 夕夕の病を病うそんありつか
十 とくあけてさるや長えの公計
十一 飛風のつとあすめくうゆささか
十二 巧う中よま茶や瓜のこりり
十三 大和あも常うく瓜やこゆの里
十四 鳥う存よこさりのまさりれ瓜作
十五 ひと風とくえとはとまたえうれ
十六 垣うゆとんけうはありてま本瓜

十七 蝶のまふあらしま何まー花の露
十八 風うあう袂の色やあうーため
十九 可まの羽やうらえまぬけりー衣
二十 ぎうくともあうハけさの清涼ー
二十一 武士のあうやゆゆの下のすー
二十二 夕くらや目のほやうと縮光
二十三 夕立うす可る仲の山移り那
二十四 うらうさうかとうらとやけし家

其れうらなしてあげやうら守の地のり
まうと玉の雲焼まんなる守
ま夕園りりあ蚊やりや天ぬ
只刀え汗くはやの山移り部
光好も焼をりあまほさよなみ
七月小
百言白はあるともやどとらういほと物
二朝りかやてうらあふひまのほさ

三 卯春や桐のころまの神のくご
四 ほろほろにらるるや野人の世高花
五 女あまといはれえつせのよまみ
六 度火まきやまきまやうらほれた神さ
七 やまに花やけあひとあう天のほ
八 させあうせ牛ひりけのうらの石
九 うさまや朝らうさより雲山神
十 うめらやう守紫の春らうゆ

さきう鞠のたのむるや一の葛えりぬ
三 野あぢひや花より衣枯復き
三 ころるやよまう西ぞくく田んが
芥人へぬらたまふ紫野よふかきう
ま 生果てしといはあへまうかあまき
ま うらんよまうるや施餼餽の瓜茄子
ま こらりあやあまうまうらんの家
六 むれうまは忠とまう子や痛うら

五 もいさりのうらうひのうらうとすさ
六 落の葉やあそまの虫のうらとこあ
三 翁草のひげや珍中はんとまう
三 けうまあといはさやこゆらまうとま
三 くらあまうまうまうまうまうま
三 出まうのあまこまうまうのきとくか
三 くららやあまぬをまうまうの苑
三 ままうまうのあまこまうまうま

花巻のふきとくれいむらじらふ
共さい紙の身とく紙の石ころ
亮 二方とて扇をさくや宿のか

八月六

百大とやや丸出る北のあのこと
二 四らよや松茸れ伊つねとこ山
三 三ヶ月のりんえりや一筆た被
四 百あさハ大さるのゆり紙

八 晴焼やあまひふれとまどうゆり
七 とうのふまやをらう年らう
六 けう子のさだやすのきくとく
五 土ちりし秘合ぬけうさぬらう
四 ちくひとちよ入らうらう
三 物守とらうや心もゆめらう
二 けいあうさうらうや入ん地
一 ちまのうらや丸花の毛の鳥の上

さよりゆりののびいよるよこふ
若きま草ハ初守りいたる人あじえ
まめい月いそん松山の若きうふ
まいさよりいのゆされよううへ日の友
ま西利きうハちらゆら日のさうか
六カぬけや舞をいお待の夜は月
えか待の月かれむいあーこふ
カぬとんや月よあのみすり衣

さ村その所よ屋とらぬ秋の月
さ九物よりたうの越吹あーふ
さ殊教とれと心のちらやういん
共あゆとらりや寸程のう所
ま丁々まらや花むしうその大徳寺
まりうれたとやゆてい志野の二袋
まふのまよあうらや五位のうお湯
六この使とらうらむむらや軍中

元 明やうくゆとら守あるもつらう
山うらも付くゆとら守やいふらう

九月小

百 にかてるるやうの都のりきらやま
二 ちの柳のまれとそむらや村りきら
三 くのうらまはうらう紅葉よかきき
四 よあかりやふきよらまのじこの山
五 ちうらむら海や河く苗りきら

六 苗あけくねとひつらにゆりや
七 ちうら海やうみりち焼比糸良寺
八 紅葉らや何とわらうの色々
九 苗あけハかきえのいふるをうら
十 身かしの山よハひつらに苗のまれ
十一 あひまゆいぬをを柳の苗の柳
十二 苗苗のうけよわらうや旅よか
十三 ちうら守ゆらやこふらの目えら

十月大

百 大鬼の果ウケムアウリウケム
 二 千早振佛とやいん神尊自
 三 ヤリケリノ鳥よのうや神尊自
 四 神尊自久に寺の巻やアム堂
 五 障子とえん屋のまじり貴見やウケム
 六 棟とハネとこりめ神尊自
 七 柘本とやあかん葉守神尊自

八 此ノ起程のハ今ウリ神尊自
 九 了えう守ハ今やウリ神尊自
 十 此ノ終やアムの家ウリ小阿彌
 十一 阿彌ウリこのこのよハの年道
 十二 阿彌ウリウレ小玉のウリ花
 十三 珍梅や野波の城よウリ
 十四 ちくととるウケの阿彌のウリ
 十五 法徳ウリウリウリウリウリ

去 立寄や千名所を此解の中
毛 三ヶ月ありのちろ種
六 浦内よりえんりや深き
元 少き河やとれ川よとれ
大 床をく破くとの右を海
世 水鳥の云ひえ海つたえれ
世 角田川やお中も佐都
世 むこちと鷹やあな待つれ

去 山少と鷹よいんか
去 ぬととえとくつと功と
去 といけいよ山人さうす
世 せこ久れ多とやお守待
六 一と鷹や河の河系の
元 とつてたやりし鷹の
元 鳴神よ鷹やおとろくそ
十一月大

百霜方のの羽やこの月のをちんちん
 二 楮非やびんの霜うさ水うさ
 三 かり立ち根やうさ土の霜ね
 四 霜天よくらや宮町子ののこ
 五 そのあや事賊てこく玉所也
 六 ちんちん子ハ多にけうふあられ
 七 柳雪とこねいりやまうまう
 八 考の雪こや山あかのひらみ綿

九 ひえかや雪やけよあう足平が
 十 旭のほえほけ出られのまらの雪
 十一 九重と一重よまき一申さひ
 十二 黒くまをさとのちれひんの雪
 十三 久遠一まのつう申さのちえが
 十四 雪はよ雪ひらりや治平の雪
 十五 ありおけのほを綿あひる富士の雪
 十六 草をもあひ一なよらるや雪は花

毛竹の下の道や雪すり白小神
 六 黄よやくやくあを雪ちちるさ朝が
 五 すりこまの雪とやふふこえは
 四 雪ハ今朝山のほりさうをふか
 三 刈りぬかしのこほさうの雪白れ
 二 雪所ありうらや冬木のすまひり
 一 大峰こころふくういのあつさか
 白すこころうすさ雪のたえんう那

五 まきりあう雪の天物やうらぬすこ
 四 雪雪のちえハたれうらあふり
 三 一うらにほきそとそん茶のゆすこ
 二 理中やうとえ茶の湯のすこりり
 一 ころりてや湯玉たりれあふら
 十 ころらひとあそやこえほくかこをぬ
 十一 二月大
 十四 田方うらととこのふりふ十二月か

二 能くやくいさうりここの志すすか
七 續りあ一年いさういの志すか
六 かのあよ十二月の仲下午を
五 このよこいさをいさうりここの
四 ひさり福いあめのういの中桶水
三 けあうやあういけのう水
二 ひさりの果定ひさうああが
一 在郷いやいりいさうの里う

十 三井寺やいけいさうい一年いさ
九 けいさういああいさうい山
八 開入お梅ういさうのういさうか
七 名いさういあいさういさうい
六 りいさういああいさういさうい
五 総うやあいの河原の草いさう
四 鈴うやあいの森のワういさう
三 出れ火よあいさういさうい入

大 水音やこもりくささうぬ身は川
九 上平はくすくやのさやのうすこもり
サ お海さうのすこえさうかの不動か
二 さえり夜の祢御や五つ去の花
三 ほくさくやまきひのほくさくの餅
三 ちきよよあらこの布や寒は
三 今つらぬ酒まのりされんぬのうら
三 の妻やこれせぬてふかんの中

五 寒のうらむいさ海をらやかんの川
五 今あまたよりくさくかまぬくらり
六 身のらくはこれれをばけふ年をか
九 けくはくさくさくはとありのもてまか
九 考やまのしあやきくちあう鬼うら

此一冊有馬在湯中全一覽平
下作意多物二山等一治之記之

法橋昌隆在判

都三条衣の棚よ貞徳とく詔語よ
可さとの所り道々庵室人音行所り
多れハ云らさ物こそくくありとれと
去若るより百有句よりや所り道に
所ふゆつとといひ多れハくあん

春
ちりきこまのこそくありとれ

あつてうしうの毛の華とあつて
解花とあつてはほろをさつて
去年やううし昌の雪はあつて
物の名もと果さぬゆゑに
つてさつてさつてさつて
さつてさつて雪の上にあつて
年とれさつて終九の鷹は夜に
花の根より入るとはさつて

酒樽をゆいさつてゆいさつて
さつてさつてさつてさつて

夜

移りさつてさつてさつて
解花の根とさつてさつて
さつてさつてさつてさつて
さつてさつてさつてさつて
さつてさつてさつてさつて

麻くもみ子結乾のよふはな
こころあはれういのかん
かひいよもちてや蟻のたるとん

秋

蟻とんは月をひらきとうあひ
月ハ文明園の夜よあけり
羽衣や月のよやこよさるん
脚つひとら牛ハ花をりあ

虫の子をけけり控さうこころれ
秋さうさ川原のあゆハゆい

冬

綿やししつとをへてうか
うらあきたしと月霜のよ
せうとのこころういぬり
かたすきたかきつそ粉
唐電へちりこのうはさ

一
祝とや馬とほく神と三つらん
馬餅はあやほくを打ぬりて
さる多まあれん後てきてし
ゆとさひく上よささあうすえさ
中同年と夜火の中へまさらん
綿野中のちい油もよれん
た汁のこゆえりもやゆらん
りたけよほとねか綿をたけり

神とまあふの小神よぬさへ
意

一
ひめをのちのちるに老いも
たのちてきりひひさるんた
八世大原母子のちるさ色入
湯油もへ入ぬるちりや
ちりこのちる牛の角も入
けくちよちるひちるちる

報

ひしくの小神を後かきあれた
濱のかり森は物の立ちか
葛の折えとくひ餅は福を
焼餅とて丸こけよかき
い所の石は刀のさやかぬり
さの盛はひけとれめつる
接しの照りよさるやこけ

年よりのこの業よくこの
あめけれうひの上よら
こさ立一のこけ
誰か世は海氏のこさ
るり立一屏風はのこ
銀具はえられはさ
り本をさるれぬり
まこけよあらひの具を

かろりくま入るや路を焼ぬん
えんせうせいまうとんいよりまゆせ
つるなうらうりの上のあまんりえ
まうあうとまやかうそりたすりゆせ
たこの粉とうりす雲色も祈り位
三番三の面とみえの形よりそり
石すりのりとりーくすさこり
然のうらや銀やえんの輪にぬ

けほりまー座敷の柱色付
有馬山屋しし行あじ塩湯は
すいあうの玉よえあう柿の環敷
薫とさうらうりのせりらゆり
ゆゆとまほりうら紙はよこれま
さうやさハたりし君えあくしと出
常香よ地元のりかハとそり
よりたのー大糸の電本あとち

帯は似る雲の初来りのさき
きさうの上は捨とくあつこ貝
ひきふりて井の脈を打入し
あつ海のうき氣は茶ゆよこれ果
つこさうちさるゝのさひさもいり
ひささみとまたにぬりつてその祢所
あささうさ茶の抽扱遊あは
ひささ百句

同年の霜月北風列江戸くつて
をよらうはふゆりり千句の發
句

第一

梅のちりりあはるこらら

第二

雪の靴あを竹を祢らら

第三

まのりしりるや牛のひま車

廿七

一丁やくらしくよひふ部公

廿八

清とのあるえハ金の扇ふ

廿九

露のひくく少せし寸祢こさの花魁

三十

雲のふか風や日ののりここさ

三十一

立白川や紅くくれりくらふれ

三十二

口切よ何由とまらぬ妻茶のふ

三十三

むら野の雪あろりく富士丸嶽



紅印
保永孫子

保永孫子
藏書
記家

紅印

